

保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修の効果
—研修後のアンケート調査の結果から—

灰谷 和代

東北公益文科大学総合研究論集第38号 抜刷

2020年7月30日発行

研究ノート

保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修の効果 — 研修後のアンケート調査の結果から —

灰谷 和代

1. はじめに

厚生労働省（2018）の報告¹によると、児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は、2015年には10万件を超え、2018年は159,850件（速報値）である。また、主たる相談種別の割合は、身体的虐待25.2%、ネグレクト18.4%、性的虐待1.1%、心理的虐待55.3%で、心理的虐待を主な虐待種別とする児童虐待対応件数が半数以上を占めている。心理的虐待による相談対応件数が、身体的虐待による相談対応件数を上回ったのは、2012年以降からのことであり、それまでは、傷や痣等の外傷から明らかに虐待と判断できる身体的虐待が多数を占めていた。これは、2004年の法改正で面前DVを心理的虐待とすることが改正された後、警察を経由した面前DVによる心理的虐待の相談件数が増え続けたからである。

被虐待児童の年齢は、未就学前の乳幼児（0歳～6歳）であるケースが増加しており、常に全体の相談件数の4割以上を占めていて、主な虐待者は、実母・実父である相談対応件数が全体の8割以上を占めている状況であることから、筆者は、2012年以降、乳幼児と実母・実父にとって身近な存在である保育現場（幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園の各保育施設の現場、以下「保育現場」とする）での児童虐待対応に焦点を絞って研究を進めてきた。

保育・教育現場が児童虐待を疑いながらも相談・通告していないケースの存在が、総務省（2012）によって報告²されており、その背景として、傷や痣などがある等、明らかに児童虐待と判断できる身体的虐待ケース等は比較的通告しやすいが、児童虐待と判断しにくい心理的虐待やネグレクト等の虐待グレーケースは、子どもや保護者との関係性を考え通告や相談に躊躇している状況で

¹ 厚生労働省の福祉行政報告例（厚生労働省，2018）のデータからの引用

² 総務省（2012）「児童虐待も防止等に関する政策評価－評価の結果及び勧告－」

あることが報告³されている。また、2013年のZ市（人口約800,000人）における保育現場の全職員を対象とした児童虐待対応に関するアンケート調査⁴では、児童虐待対応ツールが上手く活用されず、保育現場内および児童相談所や市区町村の児童虐待対応窓口といった専門機関との情報共有や児童虐待を発見しても通告や相談に至っていない可能性が示唆された⁵。そこで、筆者（2017）は、主に虐待グレーゾーンケースの相談を受理し管理していく市町村と保育現場との連携を強化するために、Y町（人口約15,000人）の保育現場と市区町村との共通アセスメントツール「子ども家庭アセスメントシート」を、保育現場と児童虐待対応担当課の職員と共に開発した⁶。この「子ども家庭アセスメントシート」は、児童虐待の有無や緊急度を判断することだけに特化したものではなく、保育現場の保育者が、日々の保育や保護者とのかかわりから発見した「心配」つまり「気づき」をきっかけに、保育者が当該児童とその当該家庭の状況を多面的に把握し全体像を掴むシートである。Y町におけるシートの試行結果からも、この共通アセスメントシートを活用することで、今まで以上の保育現場内の情報収集、保育現場内や保育現場と市町との情報共有に役立つことが明らかになっている。そして、その後、さらに、この共通アセスメントツールの活用と普及をめざして、各市町の児童虐待対応研修のひとつとして「子ども家庭アセスメント研修」を市町担当課と調整しながら実施してきた。本研究は、2018年～2020年に、3つの市町での保育者を対象に開催した「子ども家庭アセスメント研修」を実施した後のアンケート調査の結果を整理して分析し、子ども家庭アセスメント研修の効果を明らかにして、今後の研修や共通アセスメントシートの活用と普及にむけて検討する。

2. 目的

本研究は、保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修を実施した後のアンケート調査の結果を整理し分析することで、子ども家庭アセスメント研修

³ 総務省（2010）「児童虐待の防止等に関する意識等調査」

⁴ 石川瞭子（研究代表者）・灰谷和代（2013）、聖隷クリストファー大学2012年度共同研究委助成による調査

⁵ 灰谷和代（2015）、聖隷クリストファー大学社会福祉学会、聖隷社会福祉研究、第7号、pp.49-62

⁶ 灰谷和代（2017）、日本保育ソーシャルワーク学会、保育ソーシャルワーク学研究、第3号、pp.5-20

の効果を確認することを目的とする。そして、本研究の結果から、今後の研修内容および共通アセスメントツールの活用と普及について検討することで保育現場での児童虐待対応や保育現場と市町との連携強化に寄与する。

3. 研究方法

(1) 研究対象

2018年～2020年に3市町（A市、B町、C町）で実施した保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修後のアンケート調査の結果を本研究の研究対象とする。

(2) 研修プログラム（研修内容）

3市町で実施した研修内容は、①保育現場と市町との連携の必要性についての説明、②保育現場の特性を活かした「気づき（発見）」についての説明、③アセスメントシートの活用パターンの提案、④アセスメントシートの記入方法の説明、⑤今、気になるケース、もしくは過去に気になったケースを思い浮かべてアセスメントシートを記入する（個人ワーク）、であり、いずれも研修時間は1時間～1時間30分程度である。また、研修実施前には、3市町の保育現場における児童虐待対応の状況を聞き取り、各市町の担当課と研修内容の調整をするようにして、市町担当課の必要に応じて、連携の強調や保育施設内での不適切な保育の予防等の研修内容を追加している。

(3) アンケート調査項目

研修会終了後のアンケート項目は、以下の①～④である。

- ① 回答者の保育経験年数
- ② 研修内容について
- ③ 研修内容の理解について
- ④ 保育現場内や他機関との連携について
- ⑤ その他（自由記述）

(4) 分析方法

対象3市町の人口規模を確認、各市町のアンケート調査の結果を整理する。アンケート調査項目⑤のその他（自由記述）部分は、User Localテキストマイ

ニング⁷を用いて分析する。

(5) 倫理的配慮

研修実施前までに各市町の担当課へアンケート調査内容の確認と調査実施の許可を得て調査を実施している。また個人等が特定されないようにアンケートは無記名として、アンケート回答用紙の提出を以って調査協力に同意したものとした。回収後のアンケート回答用紙は、厳重に保管し、所属や個人名等の記述があった場合は個人が特定されないように配慮した。なお、本研究では児童虐待対応を取り扱うことから、市町名も特定されないよう配慮している。

4. 結果

(1) 3市町の人口規模

3つの市町の人口および児童人口を、平成27年国勢調査結果⁸を基に10以下は切り捨てて整理した。研修開催時は、3つの市町いずれも、市区町村子ども家庭総合支援拠点⁹（以下「子ども家庭総合支援拠点」とする）は設置されていなかったが、今後、子ども家庭総合支援拠点が整備することが児童福祉法の改正（2016）で努力義務となっていることから、市区町村子ども家庭総合支援拠点設置運営要綱¹⁰の5（1）に基づいた類型について確認した。結果、3つの市町は、全て小規模A型（人口5.6万人以下、児童人口0.9万人未満）の類型であることが確認できた。

表1：3市町の人口規模と類型

	人口	児童人口	類型
A市	約50,300人	約6,300人	小規模A型
B町	約14,800人	約2,300人	小規模A型
C町	約8,900人	約900人	小規模A型

※平成27年国勢調査（総務省統計局，2015）結果を基に作成（10以下は切り捨て）

⁷ 株式会社ユーザーローカルの「User Localテキストマイニング（<https://textmining1.userlocal.jp>）

⁸ 総務省統計局（2015），平成27年国勢調査（<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/>）からの引用

⁹ 市区町村子ども家庭総合支援拠点は、市区町村が実施主体であり、管内に所在する子どもとその家庭及び妊産婦等を対象とする。子ども家庭支援全般に係る業務と要支援児童及び要保護児童等への支援業務を担う。

¹⁰ 市区町村子ども家庭総合支援拠点設置運営要綱（平成29年3月31日付け雇児発0331第49号、令和2年3月31日付け子発0331第15号）には、市区町村子ども家庭支援拠点の趣旨や目的、設置に関わる基準等の運営指針が示されている。

(2) アンケート調査の結果

保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修を実施した3市町（A市、B町、C町）の研修後のアンケート結果を、それぞれ整理してまとめた。

【A市でのアンケート調査結果】

- 研修およびアンケート調査の実施年月：2018年11月
- A市内の保育施設から16名の主任保育者が研修を受講した。
- アンケート回収率：100%

① アンケート回答者の保育経験年数

アンケート回答者の保育経験は10年以上が16名（100%）であり、全受講者が主任保育者だったということもあり、保育経験年数も10年以上であった。

表2：保育経験年数

3年未満	0名
3年以上	0名
5年以上	0名
10年以上	16名（100%）

② 研修内容について

研修内容について、「とても役に立った」が10名（62.5%）、「役に立つと思う」が5名（31.2%）であり、概ね、役に立つ研修として捉えられたようである。

表3：研修内容について

とても役に立った	10名（62.7%）
役に立つと思う	5名（31.2%）
あまり役に立たないと思う	0名
役に立たないと思う	0名
その他	0名

※未回答1名

③ 研修内容の理解について

研修内容の理解について、研修でわかりにくいところは「ない」が15名(93.7%)、「ある」が1名(6.2%)であった。研修内容でわかりにくかった点として、具体的には「アセスメントシートの記入方法」の記述があった。

表4：研修内容の理解について

わかりにくいところはない	15名(93.7%)
わかりにくいところはある	1名(6.2%)

④ 保育現場内や他機関との連携について

保育現場内や他機関との連携について、困ったことが「ない」が12名(75%)「ある」が4名(25%)で、連携で困っている具体的な内容として、園内での情報共有や連携について互いに忙しくじっくり時間を取るのが難しい、病院との連携もできればと感じる、保健師との情報共有が難しい、の記述があった。

表5：保育現場内や他機関との連携について

連携に困ったことがない	12名(75%)
連携に困ったことがある	4名(25%)

⑤ その他(自由記述)

User Localテキストマイニングを用いたデータ分析では、出現頻度の高い単語のうち、名詞は「シート」「アセスメント」「記録」、動詞は「思う」「とる」「いく」、形容詞は「わかりやすい」「しやすい」「使いやすい」であった。アセスメントシートを用いた子ども家庭アセスメントに対して意欲的な記述が多く見られた。

表6：その他(自由記述)

- ・シートがある事で、何をどのように見て伝えていくのかがわかり、大変、学びがありました。
- ・今後、活用し正しい判断ができるように身につけていきたいと思います。
- ・気になること、心配なことは記録をとるように心がけていますが、アセスメントシートを利用して記録をとることで、より、いろいろな方向から気をつけて観察し聞きとることができるようになっていました。

- 様式が使いやすく慣れたら現場でもすぐに使用できると思うので助かりますし先生達の意識も高くなれると思います。
- 今、園で気になる子を頭に浮かべながらアセスメントシートを記入してみた。
- 紙面にすることで、明確化され、整理しやすくなるのでいいと思った。
- 常に、こども家庭課や保健センターと連携をとっているので、安心しています。
- 月に1回、何かあったら報告を所長にしていたのを口頭で伝えていたが、このシートを市用するとわかりやすいと思いました。使用させていただきます。
- 虐待対応だけでなく、発達に支援を必要とするお子さんにも使用することで園内の情報共有がしやすくなるように思うので活用したい。
- わかりやすい説明で良かったです。
- アセスメントシートは、記録をとっていき、または、継続してその子、その保護者を見ていくのによい資料になるかなと思いました。

【B町でのアンケート調査結果】

- 研修およびアンケート調査の実施年月：2019年2月
- B町内の保育施設から46名の保育者が研修を受講した。
- アンケート回収率：100%

① 回答者の保育経験年数

アンケート回答者の保育経験年数は、3年未満が10名（21.7%）、3年以上が2名（4.3%）、5年以上が10名（21.7%）、10年以上が23名（50%）であり、保育経験年数が10年以上の保育者の受講が最も多かった。

表7：保育経験年数

3年未満	10名（21.7%）
3年以上	2名（4.3%）
5年以上	10名（21.7%）
10年以上	23名（50%）

② 研修内容について

研修内容について、「とても役に立った」が31名（67.3%）、「役に立つと思う」が15名（32.6%）であった。概ね、役に立つ研修として捉えられたようである。

表8：研修内容について

とても役に立った	31名（67.3%）
役に立つと思う	15名（32.6%）
あまり役に立たないと思う	0名
役に立たないと思う	0名
その他	0名

③ 研修内容の理解について

研修内容の理解について、研修でわかりにくいところは「ない」が46名（100%）、「ある」が0名であった。おおむね、研修内容について理解できたと考えられる。

表9：研修内容の理解について

わかりにくいところはない	46名（100%）
わかりにくいところはある	0名

④ 保育現場内や他機関との連携について

保育現場内や他機関との連携について、困ったことが「ない」40名（86.9%）、「ある」が5名（10.8%）であり、未回答者は1名であった。連携で困っていることとして、役場の担当職員や保健師がどのような働きかけをしているのかが伝わってこない、スムーズに情報等が伝わらず、事後報告になってしまうことがあるどこまで伝えて良いのかがわからない、という記述があった。

表10：保育現場内や他機関との連携について（B町）

連携に困ったことがない	40名（86.9%）
連携に困ったことがある	5名（10.8%）

※未回答1名

⑤ その他（自由記述）

User Localテキストマイニングを用いたデータ分析では、出現頻度の高い単語のうち、名詞は「シート」「アセスメント」「活用」「共有」、動詞は、「思う」「書く」「いく」、形容詞は「わかりやすい」「よい」であった。B町においても市町との共通アセスメントシートを用いて子ども家庭アセスメントに役立てていきたいという意欲的な記述が見られた。

表11：その他（自由記述）

- アセスメントシートは、書かなくても大丈夫だろう・・・と思っていた事でも、今日、初めて書いてみると「有」が付く点がいくつかあったので、少しの気づきでも、書いて他の保育者に共有する事が大切だと思いました。
- アセスメントシート、役立てていきたいと思う。
- 気になっている子どもの記録を形に残す大切さを教えていただきました。文章に表すことが苦手であるので、丸をする項目があることが救いです。
- これからの時代、必要になってくると思います。活用させていただきます。
- 今、担当しているクラスに気になる子がいるため、記入して活用してみたいと思いました。
- 心配なことがあれば、アセスメントシートを見たり、書いたりしていきたいと思いました。
- 1人だけでなく、みんなで共有することが大事なのだ改めて感じた。アセスメントシートをぜひ活用して、子どもたちがよりよく過ごせるようにしていきたいと思えます。
- よくわかりました。1枚でも（一人でも）このシートを使わないことを、少しでも枚数が減る、増やさないようにするのがいいですね。
- 用紙に書くことによって、具体的にになってわかりやすくなるのでいいと思いました。
- アセスメントシートを実際に使用させてもらいました。1人の子をしっかり見てメモを残すことで、気づきの1つとなりました。

【C町でのアンケート調査結果】

- ・研修およびアンケート調査実施年月：2020年2月
- ・C町内の保育施設から21名の保育者が研修を受講した。
- ・アンケート回収率：100%

① 回答者の保育経験数

アンケート回答者の保育経験年数は、3年未満が2名（9.5%）、3年以上が2名（9.5%）、5年以上が4名（19.0%）、10年以上が13名（61.9%）、保育経験年数が10年以上の保育者の受講が最も多かった。

表12：保育経験数

3年未満	2名（9.5%）
3年以上	2名（9.5%）
5年以上	4名（19.0%）
10年以上	13名（61.9%）

② 研修内容について

研修内容について、とても役に立った13名（61.9%）、役に立つと思う8名（38.1%）であり、A市およびB町と同様、概ね、役に立つ研修として捉えられたようである。

表13：研修内容について

とても役に立った	13名（61.9%）
役に立つと思う	8名（38.1%）
あまり役に立たないと思う	0名
役に立たないと思う	0名
その他	0名

③ 研修内容の理解について

研修内容の理解について、研修でわかりにくいところは「ない」が20名（100%）、「ある」は0名で、未回答者は1名であったが、おおむね、研修内容

は理解できたと考えられる。

表 14：研修内容の理解について

わかりにくいところはない	20名（100%）
わかりにくいところはある	0名

※未回答1名

④ 保育現場内や他機関との連携について

困ったことがない20名（95.2%）、困ったことがある1名（4.7%）、連携で困っていることとして、保育現場での心配、困りごとを他機関に伝える機会が少ない、という記述があった。

表 15：保育現場内や他機関との連携について（C町）

連携に困ったことがない	20名（95.2%）
連携に困ったことがある	1名（4.7%）

⑤ その他（自由記述）

User Localテキストマイニングを用いたデータ分析では、出現頻度の高い単語のうち、名詞は「シート」「アセスメント」「記入」「大切」、動詞は「思う」「いく」「気づく」、形容詞は「多い」「良い」であった。アセスメントシートを活用し、日々の気づきを積み重ねていくことや客観的に見ることの大切さ等、C町においても意欲的な記述が多く見られた。

表 16：その他（自由記述）

- ・保育現場での子どもの様子をしっかりみていこうと思いました。
- ・日々の保育で見落としているところはないか、改めて、気をつけていこうと思いました。
- ・アセスメントシートの存在を知ることができ、実際に記入し現状を知りました。
- ・その日の気づきから、毎日、積み重ねていくことが大切だと思った。
- ・客観的にみて、みることも大切だと思った。
- ・保育現場での気づきを一層大切にしていき、小さなことでも行政や保健師の方々と連絡をとりあっていきたいと思います。
- ・園内でも職員間での気づきを共に伝えあっていきたいと思います。
- ・アセスメントシートの記入することにより、少しでも気になることなど、日々、キャッチし記録するようにしたいと思った。

- ・実際、担任していた子どものことをイメージしながらアセスメントシートを記入すると、意外と有が多くて驚きました。
- ・ただ、心配だとおもっているだけより、シートに記入してみると、ハッキリ、目に見えると感じました。
- ・保育士として15年やってきましたが、幸いなことに身近な事例がありませんが、これからそういう場面になった時は、今回の研修の内容を活かしていきたいと思います。
- ・アセスメントシートを活用、写真等、記録つけていきたいと思いました。
- ・よくわかり、アセスメントシートの活用は、とても良いと思いました。
- ・新任であったため、シートの活用にはピンときませんでした。普段の子どもたちの様子を別の視点から見るとということも大切だと思えることができました。
- ・連携について、困っているところはない。困っていることがあった時は、行政や保健師と相談しながら進めています。

(3) テキストマイニングによる分析

以下の図表は、3市町（A市、B町、C町）のアンケート調査項目⑤その他（自由記述）の全てのデータを、User Localテキストマイニングを用いて分析したものである。

図1および表17から、出現頻度の高い単語のうち名詞は「シート」「アセスメント」「活用」「記入」「記録」「大切」、動詞は「思う」「いく」「気づく」「書く」「とる」「できる」、形容詞は「わかりやすい」「しやすい」「良い」であることがわかる。自由記述に出現する単語の出現パターンとしては、図2の共起キーワードから、「アセスメントシート」－「思う」－「いく」、「園内」－「情報共有」－「必要」、「情報共有」－「しやすい」－「紙面」－「いい」等がつながったパターンが多い。これらの結果から、研修を実施したことによって、わかりやすい、使いやすいアセスメントシートが印象付けられ、また、園内の情報共有としてシートの活用が必要と思う研修となったことが考えられる。

図1：ワードクラウド

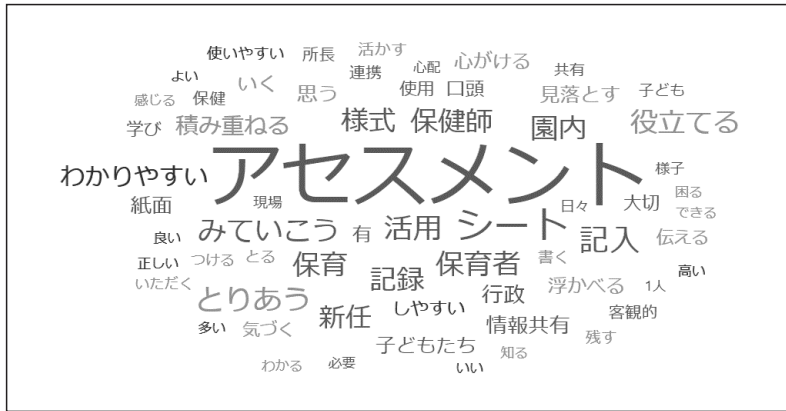
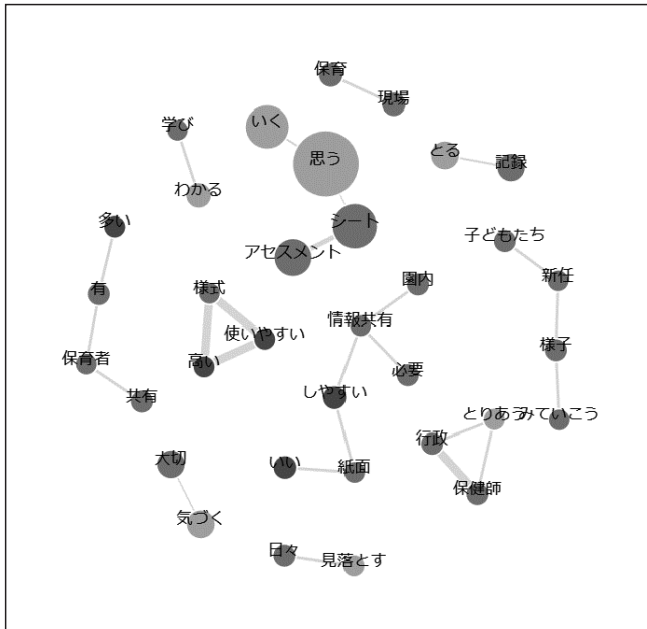


表17：単語出現頻度

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
シート	19.27	18	思う	0.41	27
アセスメント	79.52	13	いく	0.38	14
活用	6.47	8	気づく	0.21	5
記入	8.36	5	書く	0.13	5
記録	2.41	6	とる	0.11	5
大切	0.83	5	できる	0.03	5
使用	0.62	4	つける	0.07	4
保育	2.61	3	伝える	0.20	3
子ども	0.38	3	いただく	0.06	3
現場	0.26	3	わかる	0.02	3
心配	0.10	3	残す	0.11	2
園内	4.21	2	困る	0.05	2
保健師	2.18	2	感じる	0.02	2
行政	1.34	2	知る	0.01	2
子どもたち	1.07	2	とりあう	0.210	1

■ 形容詞	スコア	出現頻度	■ 感嘆詞	スコア	出現頻度
わかりやすい	0.62	3	---	---	---
しやすい	0.26	2	---	---	---
よい	0.01	2	---	---	---
良い	0.01	2	---	---	---
いい	0.00	2	---	---	---
使いやすい	0.11	1	---	---	---
正しい	0.05	1	---	---	---
高い	0.01	1	---	---	---
多い	0.00	1	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---

図2：共起キーワード



5. 考察

本研究では、2018年～2020年に3市町（A市、B町、C町）で実施した保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修後のアンケート調査の結果を、市町ごとに整理し分析し、3市町全体を自由記述部分のUser Localテキストマイニングによって分析した。

アンケート調査の結果を整理・分析に入る前に3市町のそれぞれの人口規模を確認した結果、いずれも小規模市町であることが確認できた。また、児童福祉法の改正（2016）によって、今後、各市区町村で整備および設置が進められる子ども家庭総合支援拠点の運営要綱、「市区町村子ども家庭総合支援拠点設置運営要綱（平成29年3月31日付け雇児発0331第49号）」の5（1）に基づいた類型を確認した。結果、本研究の対象となった3市町は、いずれも小規模型（小規模市・町村部）の「小規模A型」（児童人口概ね0.9万人未満、人口約5.6万人未満）であることが確認できた。類型には、小規模型の他にも中規模型

(中規模市部：児童人口概ね2.7万人以上7.2万人未満、人口約17万人以上約45万人未満)、大規模型(大規模市部：児童人口概ね7.2万人以上、人口約45万人以上)があり、小規模型には、小規模A型の他にも、小規模B型(児童人口概ね0.9万人以上1.8万人未満、人口約5.6万人以上約11.3万人未満)小規模C型(児童人口概ね1.8万人以上2.7万人未満、人口約11.3万人以上約17万人未満)に区分される。「小規模A型」は、類型の中でも極めて小規模な類型であり、子ども家庭総合支援拠点の設置時に必要な配置人員として、小規模A型の類型では、虐待対応専門員の配置を求められないが、子ども家庭支援員の常時2名(1名は非常勤形態でも可)という最低配置人員が定められている。

次に、2018年～2020年に3市町(A市、B町、C町)の市町ごとに保育者を対象とした子ども家庭アセスメント研修後のアンケート結果を整理した。

A市では、2018年11月に研修を開催し、A市内の保育施設から16名の主任保育者が研修を受講した。アンケートの回収率は100%であり、アンケート回答者の保育経験年数は16名全員(100%)が10年以上であった。研修について、ほぼ全員が「とても役に立った」と「役に立つと思う」のどちらかに回答しており、研修そのものは役に立つ研修として据えられたようである。研修内容で、「わかりにくいところはある」と答えた回答者が1名いて、そのわからないところは、「アセスメントシートの記入方法」であったことから、より丁寧な説明が必要であることがわかった。保育現場内や他機関との連携については、「困ったことがない」が7割以上だったものの、2割以上が「困ったことがある」と回答しており、園内での情報共有や連携についてお互いに忙しくじっくり時間を取るのが難しい、病院との連携もできればと感じる、保健師との情報共有が難しい、の記述があり、連携に対して苦慮している点が明らかになった反面、自由記述では、本研修で提供した子ども家庭アセスメントシートの活用を前向きに考える状況が示唆された。

B町では、2019年2月に研修を開催し、B町内の保育施設から46名の保育者が研修を受講した。アンケート回収率は100%である。アンケート回答者の保育経験は、3年未満が10名(21.7%)、3年以上が2名(4.3%)、5年以上が10名(21.7%)、10年以上が23名(50%)であり、保育経験年数が10年以上の保育者の受講が最も多かった。B町においても、研修について、ほぼ全員が「と

でも役に立った」もしくは「役に立つと思う」と回答しており、本研修は、役に立つ研修として据えられたようである。研修内容についても、A市での研修内容からさらに改善したこともあり、研修内容の理解について「わかりにくいところはない」が100%となった。保育現場内や他機関との連携については、困ったことが「ない」が8割以上だが、困ったことが「ある」の回答者も1割程度あり、連携で困っていることとして、役場の担当職員や保健師がどのような働きかけをしているのかが伝わってこない、スムーズに情報等が伝わらず、事後報告になってしまうことがある、どこまで伝えて良いのかわからない、という記述があった。今後、子ども家庭アセスメントシートを活用した連携強化が望まれる。

C町では、2020年2月に研修を開催し、C町内の保育施設から21名の保育者が研修を受講した。アンケート回収率は100%である。アンケート回答者の保育経験年数は、3年未満が2名(9.5%)、3年以上が2名(9.5%)、5年以上が4名(19.0%)、10年以上が13名(61.9%)、B町と同じく保育経験年数が10年以上の保育者の受講が最も多かった。研修内容について、A市・B町同様、回答者のほとんどが「とても役に立った」「役に立つと思う」のどちらかに回答しており、役に立つ研修として据えられたようである。研修内容の理解について、「わかりにくいところはない」がB町と同じく100%の回答率だった。保育現場内や他機関との連携については、連携について困ったことが「ある」が9割以上だが、困ったことが「ある」の回答者も1名のみあり、保育現場での心配、困りごとを他機関に伝える機会が少ない、という記述があった。子ども家庭アセスメントシートの活用が期待できる自由記述も多くみられた。

本研究の対象市町は、いずれも小規模市・町村部の地域ではあったが、子ども家庭アセスメント研修後の全体の自由記述のUser Localテキストマインド分析からも子ども家庭アセスメントシートが定着や活用や普及に向けた研修として、保育者にとって役に立つ、有効な研修であることがいえる。各市町のアンケート結果からは、保育現場内や他機関との連携について、市町村との連携だけではなく、保健師や病院等の医療機関との連携等、まだまだ苦慮している点が明らかとなったので、今後の課題としていきたい。

現在、A市とB町では、本研修をきっかけとして、本研修で提案した子ども

家庭アセスメントシートが、それぞれの市町の状況にあわせてカスタマイズされた形での活用と普及が進んでいる。研修で使用した子ども家庭アセスメントシートは、開発時に現場の声を十分に取り入れたアセスメントシートではあるが、より活用・普及を進めていくためには、各市町の状況に応じたカスタマイズが必要である。また、研修から市町独自のシートやツール開発へのカスタマイズにつなげていくためには、時に研究者は研修を通じた実践現場へのインパクトを与える存在となり、さらに、研究者が市町担当課と保育現場の間、つまり複数の関係機関の間に立つことで、どちらか片方からの一方向的な2項関係にはならず、研究者も交えた3項関係が保たれることで連携強化がより進むことが考えられる。

6. おわりに

本研究は、小規模市町の地域の研究結果となっている。今後、各市町において、人口規模に応じた整備が求められている子ども家庭総合支援拠点の設置等を考えていく上で、人口規模に応じた児童虐待対応策や児童虐待対応実践モデルの構築が必要となると考えられる。

謝辞

本研究のアンケート調査の実施において、各市町の担当職員および保育現場の職員の方々にご協力頂きましたことを心から感謝申し上げます。

付記

本論は、日本子ども家庭福祉学会第20回全国大会の自由研究報告にて筆者が口頭発表した内容を加筆したものである。